

<実践報告>

コミュニケーションする力を高めるための 「話すこと・聞くこと」の教材化

益地憲一 信州大学教育学部言語教育講座

児玉順夫 信州大学教育学部附属松本中学校

The Development of Materials Teaching Spoken Japanese

MASUCHI Ken'ichi : Faculty of Education, Shinshu University

KODAMA Yoshio : Matsumoto Junior High School Attached to
Faculty of Education, Shinshu University

In this research, we have made it clear that three points of view are very important for developing learner's ability to communicate in spoken Japanese. One is speech material and the others are speech situations and a learners partner. This year, we emphasized role of the dialogue with a stranger and tried to use the linguistic situations for developing teaching materials.

【キーワード】 新しい学習指導要領 話すこと・聞くこと コミュニケーションする力
誰もがつかえるような素材 教材化

1. はじめに

新しい学習指導要領が平成 14 年度から完全実施される。県下各地の学校現場では移行措置期間ということもあって、ここ 1, 2 年、「話すこと・聞くこと」を積極的に取り込んで教材化しようとする動きがあり、授業実践が数多くなされている。例えば、長野県中学校連合教科研究会で各学校から提出されるレポートの中で、「話すこと・聞くこと」の内容にかかわるものは、ここ数年かなりの割合を占めている。これまでは、「教材が少ない」「評価が難しい」等の理由で、学校現場では研究内容として敬遠されてきた内容であったが、このように認知されてきたのはどうしてなのだろうか。一つには、新しい学習指導要領の影響ということが言えるだろう。しかし、一方で、子どもたちが「生きる力」を育んでいくためには、言葉で伝コミュニケーションする力を高める必要があるという認識を、子どもたちとじかに接する現場の教師がもち得てきたということも言えるだろう。

ところで、「話すこと・聞くこと」を教材化し授業を構想するにあたり、素材である言葉をどのように生み出すか、換言すると、どのような学習場面の中で子どもたち

が言葉と出会うのかということが問題になってくる。そこで、子どもたちの言葉に対する関心を高めるために、子どもたちの生活場面や、言葉での表現を必要とする場面をとらえ、その中でつかわれている言葉に焦点を当てて教材化することになる。例えば、小学校で姉妹学級の活動から立ち上げて、その活動の中でつかわれる言葉を取り上げたり、中学校で総合的な学習の時間の発表会を行うときのプレゼンテーションの言葉を取り上げたりする場合がある。確かに、そのような立ち上げ方をした学習においては、子どもたちの活動への意欲と比例して、つかわれている言葉への関心も高くなる。しかし、その単元をつくるためには、非常におおがかりな仕掛けや学習展開の構造が必要で、「ひとつやってみようか」と軽い気持で取り組むことができないのも事実である。現在の「話すこと・聞くこと」の学習の広がりが一時的熱病のようなものだとすると、熱病が冷めたときには、誰も敢えて教材化しようと思わないかもしれない。

そこで「話すこと・聞くこと」について、誰もがつかえるような素材を選び、教材化し、単元展開の構想をつくる。そして、そのようにして選んだ素材や、それを教材化したもの、単元展開の構想などをいくつか集め、体系化していく。さらに、それらの構想を実践して修正し、よりよい事例としていく。そのような作業をしていきたいと考えている。

そこで、今年度は、まず、初対面の人に出会ったときのコミュニケーションの仕方を学習する教材を開発しようと考えた。研究授業は、平成 12 年 10 月 21 日（土）に信州大学教育学部附属松本中学校で実施された。授業者は信州大学教育学部附属松本中学校の児玉順夫教諭である。外部講師として信州大学教育学部附属長野中学校の森本浩正教諭が授業に参加した。以下に授業実践の概要を示したい。

2. 単元づくりを通した教材化の試み

2.1 単元名

「つなげてみよう、対話を I ～あなたは、だれ、どんな人?!～」(中学校 3 年) 2.

2 単元の概要

《このような生徒に》

- ① 友だち同士では身近なことや興味をもったことを話題にして対話する場面が多く見られる。
- ② 地域の人でも、ふだん親しいつきあいがなく、生徒と年齢的な開きのある人とは対話する機会が少ない。また、生徒もそのような場面で、積極的に話題を見つけて対話しようとする意欲がもてないことが多い。

《このような単元で》

- ① 招いた方が附属長野中の先生だということがわかり、附属長野中がどんな学校なのかということを話題にしながら、話し相手が心地よいと思える対話を友と協力しな

がらつくることができる。

《このような手だてで》

- ①話し相手が初対面のとき、その人がどういう人か探っていくような対話のあり方を友と考える場面をまず設定する。そこでは、天候や時事問題などの一般的な話題の中に質問を交えていく話のつなげ方に気づくように、話題の例を提示し考えられるようにしたい。
- ②話し相手がどのような人かわかった後、その人と話をつなげていけるようにするために、共通の話題や、その話題にかかわる話し方の例を提示し考えられるようにしたい。
- ③話し相手の初対面の大人としては、姉妹校の附属長野中学校の森本先生をお願いする。森本先生を話し相手にすると、ふだんは互いに交流することのない姉妹校という点で興味が高まり、共通性のある話題が生まれてくると考えられる。

2. 3単元の目標

初対面で年齢が隔たっている人とも、共通の話題を探ることによって積極的に話せることがわかり、日常生活でも積極的に話題を見つけて対話していこうという意欲をもつ。

2. 4単元の構成（全4時間扱い）

第1時：話が途切れて続かなくなつて困った体験から、初対面で年上の人と話すときの話題を考え、実際の会話に向けて計画を立てる。

第2時、第3時

：相手の興味や関心に合わせて話題を提示したり、相手の気持ちを考えながら会話をつなげたりしながら、初対面で年上の人（長野中の先生）と話す。

第4時：長野中の先生との会話を振り返り、初対面で年上の人との会話で使えるような方法をまとめ、次の機会に使ってみようという意欲をもつ。

2. 5教材化にあたっての留意点

① 相手のプロフィールを探るための対話の教材化について

○森本先生を「Xさん」ということにして、その正体を探る対話を行うようにする。
生徒は森本先生に様々な質問をすることが許させる。ただし、職業と勤務先についての質問には、森本先生は答えないようにすることを確認する。

○「Xさん」の正体を探る対話を行う前に、グループごとに対話の内容を考える話し合いを行えるようにする。

○時間の関係で、対話を行うのは一つのグループであるが、そのグループと「Xさん」の対話をもとに、学級全体で「Xさん」の正体を推理する場面を設定する。

○ゲーム感覚で対話をしたり、「Xさん」の正体を推理したりすることにより、初対面で年上の人との対話にも抵抗なく取り組めるようにする。

② 話し相手との共通の話題をもとにした対話の教材化について

○「姉妹校の長野中について知りたい」という生徒のねがいから、長野中と松本中の共通点や相違点を話題にして対話するという方向で学習の見通しを立てる。

○森本先生との対話の前に、各グループで、対話につかう話題を詳しく決めだす話し合いを行う場面を設定する。

○上記の学習場面では、森本先生は教室から出て国語科研究室で待機する。その際、森本先生から事前に長野中の情報を得て話題のヒントにできるように、各グループから一人の生徒が接待係として森本先生と対話するようにする。

○対話は各グループ3分～5分程度とし、一つのグループが対話をしているときは、他のグループは、その対話を聞き、学習カードに対話の評価を記入するようにする。

③ 対話を振り返る場面の教材化について

○他のグループの対話を聞きながら評価を記入してきた学習カードをもとに、森本先生と行った対話の感想を発表しあう場面を設定する。

④ 学習グループの構成について

○学級を6グループに分け、1グループの生徒は6～7名である。

○できるだけ話しやすい雰囲気をつくるために、日常生活を共にしている生活グループを活用する。

3. 授業の実際

3.1 本時の位置

全4時間中の2・3時間目（100分授業）

3.2 本時のねらい

初対面で年上の人と楽しく続ける対話を行う場面で、長野中と松本中の共通点と相違点という話題をもとに、学校生活、クラブ、文化祭、学習などの具体的な内容について、長野中の森本先生と対話することを通して、年上で初対面の人とも共通の話題で対話することにより心理的に近くなることを実感する。

3.3 本時の実際

① 初対面のXさんの正体を探る対話の場面で

日常生活では初対面の相手とうまく話せないという実態をもとに、生徒は前時に初対面の人と話す方法を考えた。本時は初対面の人と実際に話す場面である。その学習に向けて、生徒は期待感を込めてねがいを発表した。

教師：（略）前の時間のこと思い出してみてください。対話をつなげようという勉強をしているわけだけど、前の時間に考えた今日のねがいを発表してくれるかな。

R子：この間は、知らない人と会ったときにどういう対話をするかと考えたんだけど、先生がおじさんを連れてくるといっていたので、相手の考え方や性

格を知るためにはどんな対話ができるか考えてみたいです。

A子：この間は沈黙になる場合のことも考えたのですが、そうなった場合どうしたらいいかという対処法をみんなで出し合ったので、私の場合は質問攻めにするという方法を考えたので、それとかあと、友だちが言った方法も試してみたいです。

生徒の前に初対面の人である附属長野中学校の森本先生が登場した。森本先生はその正体を明かさないでいるため、Xさんということになっている。生徒は教師からの提案で、Xさんの正体を探るための対話を考えた。そして、代表である4班の生徒が実際にXさんと話し、その対話をもとに全員でXさんの正体を推理していくということになった。

K男：じゃあ、よろしくお願いします。家族はいますか。

X：おります。

K男：お子さんは？

X：ばあちゃんとかあちゃんと子どもと私。

K男：お子さんは何人ですか。

X：一人です。

K男：ありがとうございます。

K介：お子さんは何歳になられますか。

X：えー、12歳だと思います。(笑い) 小学校6年生です。

(中略)

K介：今の仕事のきっかけは何ですか。

X：きっかけ？これ、ほんとのこと言わなければいけないんですか。

教師：はい、言ってください。

X：そうですね。小学校のころは特に思わなかったんですが、中学になったとき、国語の先生に影響を、刺激を受けまして、それがきっかけですね。

K男：今の奥さんとは職場結婚ですか。

X：これも正直に言うんですか。

初対面の人と話すときは、まず、その人にかかわる人間性などの重大な内容を話題にすることは避け、プロフィール的な内容を話題にする。そうやって探りを入れながら、次第に話題として人間性などの重要な内容を含んだものを選んでいく。この学習でも、生徒はそのような道筋で対話を進めている。

初対面であるXさんの正体を探る対話を通して、生徒は森本先生についての情報を手に入れることができた。その情報には二種類あり、一つは職業、年齢、住所、

家族構成等の、言わばプロフィール的な情報である。もう一つは対話そのものを通して垣間見える森本先生の人柄にかかわる情報である。生徒は前者の情報を得ながら、森本先生の気さくで話しやすい人柄を感じて、仕事のきっかけや結婚という、初対面の人には質問しにくい内容も話題として選び対話していったのであろう。

② Xさんの正体を予想する場面で

Xさんである森本先生と4班の対話が終わった。生徒はXさんの正体についてさかんにささやき合っている。そこで、教師はXさんの正体を予想し、発表するように勧めた。

Y彦：理科の教師。

教師：どこから理科の先生だと思ったの。

Y彦：研究者に近い仕事で、教師に影響を受けたというところで、子どもとかに会ってないらしいから。

教師：教師になると子どもに会えないんだ？

生徒全員：（笑い）

教師：児玉先生のこと想像してるな。なるほど。理科の先生が学校の中で一番研究者らしいんだ。国語はあんまり研究者らしくないんだね。なかなかいい推理だね。

M美：ジャーナリストじゃないですか。

教師：どこからそう思った？

M美：中学の国語の先生に影響を受けたというところと、あと、研究者に近いというのは、そんな感じかなと思いました。

S夫：公衆衛生研究所の検査員。

生徒全員：（笑い）なんだよ、それ。推理し過ぎだって。

教師：S夫君、何で公衆衛生研究所の検査員だと思ったの。

S夫：研究とかいうところと、あと、何か、とりかえあう、今日は仕事がないとか休みだっていうところから。

教師：なるほど。公務員系だってことだね。

K美：M美さんのにつけたしで、私もそういう感じだと思いました。雑誌とか、そういうものを編集するとか、国語の先生の影響を受けたということでそうじゃないかと思いました。

教師：なるほど。編集者。

K志：信濃毎日新聞のコラムニスト。

R子：（笑い）近いかもしれない。研究に近くて国語の先生に影響を受けたんだから。

（中略）

A子：編集者やコラムニストに近くてジャーナリスト系で、記者。

教師：やっぱり、さっきの国語のあたりのことで？

A子：はい。

生徒はXさんと4班の対話をもとに、自分なりの根拠をもってXさんの正体を予想していった。しかし、発言が続くに従って、根拠のない思いつきのような予想が出てくるようになった。そこで教師は、発言を打ち切って、Xさんに自分の正体を明かすようお願いした。

X：正解は、私は教師をしています。

生徒全員：ええ、おお（どよめく）

X：教科は…

生徒全員：何で休みなんですか。

X：学校休みなんだもの。

生徒全員：どこの学校？

X：長野で教師をしています。国語を教えています。ストレートに言い過ぎてしまい、あの時はドキッとしてしまいました。しまったとね。

教師：どこの学校の先生ですか。

S輔：長野附属中。

X：そうです。

生徒全員：ほお。（どよめく）

生徒は食い入るように自分の正体を語るXさんの話を聞くことができた。それは、教師というXさんの答えが、生徒たちの予想の一つであったためであり、また、生徒がXさんの人柄そのものに興味をもったためだとも考えられる。また、附属長野中学校の先生だとわかったときに生徒がどよめいたのは、姉妹校である長野中学校へ生徒が興味・関心をもっているための反応だと考えられる。

③ 森本先生との対話の話題を考える場面で

Xさんが附属長野中学校の森本先生だとわかり、生徒は日頃から長野中学校について疑問に思っていたことを尋ねようと考えた。そこで、教師は「長野中と松本中の共通点や相違点を話題にして対話をつなげていこう」と投げかけ、各グループごとに森本先生との対話につかう話題を考え、対話の計画を立てるようにした。6班は次のように計画していった。はじめは、何を話してよいのか迷っていて、話題にしたいことがなかなか出なかった。

R子：うーん。（困った表情）ぜんぜん知らないものね。

(中略)

R子：どうだった？

M子：体操着が灰色なんだって。制服も決まってないみたい。修学旅行も広島に行くんだって。

R子：これでいいかな。(学習カードを見せる)

M子：制服のことも書いといたらいいよ。

S男：ブレザー？校風のことも聞くといい。

R子：修学旅行のことも聞こう。他は？

I男：ボランティアのこと。

R子：あっ、そうだ、ボランティアのこと書こう。じゃあ、しゃべる人決めよう。

I男君公開のことやって。M子さんは？

M子：これ。(「長野中の自慢」を指さす)

R子：S男君は？

S男：修学旅行と校風のこと。

R子：M子さん、松本城清掃について言ってくれる？

M子：(うなずく)

接待係として森本先生と話してきたM子話を聞いて、松本中と違う点がいくつかあることに気づき、校風のことや修学旅行のことが話題として考えられてきた。そして、この話題をそれぞれの班員に割り振って対話をするように計画した。しかし、この方法では、ある程度の質問はできるが、話題が単発に終わってしまっていて続かない可能性がある。そのことについては、ここでは生徒はまだ気づいていない。教師も、ここでは敢えてそのことを指摘せず、森本先生との対話を体験してから気づかせたいと考えた。

④ グループごとに森本先生と対話する場面で

いよいよ森本先生との対話が始まった。まず、6班が森本先生との対話を行った。

S男：長野中の修学旅行はどんな感じですか。

森本：二泊三日で広島に行ったり京都に行ったりします。お勉強する修学旅行です。

S男：長野中の校風はどんな感じですか。

森本：気品のある生活をする事です。

I男：長野中の公開は…

森本：授業を公開します。皆さんと一緒にですね。教科の発表があったり、総合学習があったりします。

I男：他に…

森本：お昼の時間に歌を発表したり，学校の様子をビデオで紹介するというようなこともしています。

R子：今，総合の時間をやっているんですけど，長野中でもやっていますか。

森本：やっていますね。人とかかわること，社会とかかわること，命とかかわることということでやっております。（中略）

M子：長野中の一番の自慢は何ですか。

森本：720人の子どもたちです。

生徒全体：えー！（どよめく）

M子：ボランティア活動などは行われていますか。

森本：皆さんにもあると思うんですけど，選択教科というのがありまして，その中で，ふれあいサポーターという講座をとった人たちは近くのお年よりのホームに行ってボランティア活動をしたりとかしています。

R子：松本中では音楽集会有很多いんですけど，長野でも音楽集会有りますか。

森本：全校集会の中で歌の練習というのが，月に一回公開の近くにありますが，うんとやります。歌とそ掃除を大事に考えています。帰りの会のときにもしょっちゅう歌っています。毎日歌っています。

6班の生徒の対話は予測通り森本先生との一問一答の対話に終わった。しかも，一人が話して森本先生が答えて，そして次の人の順番になるという典型的なものであった。対話を終わった6班の生徒は，やや不満な表情をしていた。

⑤ 森本先生との対話を振り返る場面で

6班全ての対話が終わった後，教師は生徒に森本先生との対話を振り返って感想を書くように促した。生徒は学習カードに感想を書き，発表し始めた。

A子：初対面の人と話してみたんですけど，思っていたより緊張しないで対話が楽しくできましたと思います。

S志：僕は森本さんと対話することはできなかったんだけど，前よりは知らない人とでも話しやすくなった。

教師：前はどちらかというと逃げちゃう方だったものな。

K志：今日は7対1だったから，こっちが気楽に話せたんだけど，1対1でやると，ちょっと気まずくなっちゃうかもしれないので，話すときは大勢の友達と一緒に話したい。

教師：大勢友だちがいて話した方がよく話せるということだね。楽しくね。

M子：話題によってはどんどんつながっていけるものもあるし，そうじゃないものもあるから，質問内容は対話がつながっていくかどうかについて重要だと思いました。

M美：今日はなんか、みんな質問だけをしていただけて、自分たちのことを話さないで、何か、対話が途切れちゃうようで、一つ一つがあまりつながらない。もうちょっとお互いに話しを盛り上げていってつなげていけばいいと思います。

教師：今M美さん言ったこと大事なことだね。今日は質問をいっぱいしたけれども、質問から、お互いのことを話す対話にはならなかった。松本中のことをあまり話せなかったものね。そういう点でもう一歩だったとM美さん話してくれたね。

生徒の感想は二つの傾向に分けられる。まず一つは、初対面の人と対話ができたことに対する満足感が中心的な内容の感想である。しかし、そういった感想の中にも、一人対一人になったときはうまく対話できるかどうか不安だというものもあった。もう一つの感想は、対話をつなげていくということについての気づきが中心的な内容のものである。これは、授業のはじめの「対話をつなげていく」というねらいを意識した気づきであった。その気づきの中で、M子は対話をつなげていくためには質問内容が問題であるということを指摘し、M美は質問だけでなく、自分のことも話すことによって対話がつながっていくことを指摘している。非常に重要な指摘である。

3. 4授業実践からの示唆

① 初対面の人と心理的に近くなるようにする対話を教材化する

初対面の人との対話では、まず心理的な障壁を取り去ることの大切さを子どもたちが学ぶ必要がある。そこで「Xさんの正体を探ろう」という教材をつくり、相手のプロフィールを探りながら心理的な距離を近づけていくことができるようにした。子どもたちは、その中で話し相手の人柄をも感じ取り、相手の内面に迫るようなことを尋ねることができた。

② 互いの共通点や相違点に興味をもてるような話題にかかわる対話者を教材にする

ここでは姉妹校の先生に来てもらうということで、ふだんは意識していないが、興味のある姉妹校との共通点や相違点にかかわる話題に子どもたちが着目できるようにした。このように、子どもたちが生活を振り返り、互いの共通点や相違点に興味をもてるような対象とかかわる対話者を教材とする必要がある。

③ 「対話の計画→対話の実行→対話の見返し」という学習の流れを確立する

対話を行うときに、まず話し相手を想定して話題を考えていくことが有効であることがわかった。これは日常生活の中でも、話し相手を前にして行っていることであり、それを明確な形で学習として位置づける必要がある。さらに、その対話を振り返って、よりよい対話にしていく気づきを生み出す場面も必要である。そのためには、友と自分の対話を比べて、自他の対話のよさや不足している点に気づけるよ

うな教師の支援も必要である。

④ 対話をつなげるためには、一方的に質問するだけではだめだという気付きをもつ

最後の場面でのM美の発言が重要であった。話し相手に一方的に質問することだけでは対話がつながらないことへの気付きである。それは、すなわち、質問ばかりする対話への違和感である。このような違和感を感じられるM美の言語感覚を学級全体のものにしたい。

4. 終わりに

冒頭で「そこで「話すこと・聞くこと」について、誰もがつかえるような素材を選び、教材化し、単元展開の構想をつくる」と書いたが、実践してみて初めて、その困難さが実感された。例えば、話題である。学習の中で、生徒と話し相手が共通の基盤に立てる話題を想定することが難しかった。学校の外部から話し相手を取り込む場合、生徒の生活や意識との接点を探っておくことが重要だと考えられる。また、その話し相手自身の人柄や個性も問題である。生徒にとって魅力のある人柄で、生徒が興味をもてる話し方ができることが、授業の中に外部から話し相手を取り込んでくる条件になるということがわかった。そして、こういう人材を発掘するには、時間がかかるし、教師自身が地域に入り込んで、地域の方と対話しながら探していく努力をしなければならぬと考えられる。しかし、こういった試みや努力を重ねていくことが、「話すこと・聞くこと」の教材の開発につながることを信じている。

今回の教材では、例えば隣の学校の先生を対話者とするという方法をとれば、どの学校現場でも使えると考えられる。また、中学生にとっては高校生や高校の先生、小学生にとっては中学生や中学校の先生も話し相手とすることができるだろう。重要なことは、生徒にとって話し相手となるそういった人と、まず教師自身が会うこと。そして、生徒との話題の接点や、その人の人柄や個性を探り、生徒の話し相手として適切かどうか見極めることであろう。

今年度は初対面の相手を対話者としたが、来年度以降、生徒にとって様々な関係をもっている人との対話を教材化していこうと考えている。

参考文献

信州大学教育学部附属松本中学校 第43次公開研究会紀要

(2001年3月31日 受付)